群教セ	G14 - 02
	平15.213集

見通しをもって活動できる能力を高める指導の工夫

── ものづくりを取り入れた総合的な学習の時間「高山村歴史民芸館を作ろう！」を通して ──

特別研修員　　伊藤　義明

《研究の概要》

本研究の目的は、自己の課題に対して試行錯誤できるような手だてを施すことにより、生徒の見通しを持つ能力を高めることである。総合的な学習の時間において、ものづくりを取り入れた高山村歴史民芸館を開設する活動を行うにあたり、生徒に、ものづくりの計画と作業の見通しがもてるよう、「計画的な面談」と、「振り返りを重視したポートフォリオ」を指導の工夫として実践した研究である。

【キーワード：教育課程　総合的な学習－中　地域教材　地域学習　ものづくり

Ⅰ　主題設定の理由

高山村は吾妻郡の東端に位置しており、中之条町、沼田市、小野上村などに隣接した地域である。また、江戸時代には三国街道の宿場町として栄え、中山本陣跡等、歴史をしのぶ文化財に恵まれている地域である。しかし、現在ではその役割を国道17号に譲り、宿場町としての活気は過去のものとなっている。また、昔ながらの山村の風情を残す自然豊かな村であるが、それを生かし、近年では県立天文台が設置されるなど、再び脚光をあび始めてもいる。

本校は、昔ながらの素朴で素直な生徒が多いものの、他地域の生徒と同様、様々な生活経験に乏しく、直接体験の少ない生徒が増えてきている。そのため、豊かな自然や歴史的風土を自分たちの生活の向上に充分生かしきれていない様子が多く見られる。２年生は少人数の学年（男子24人　女子21人　計45人　学級数２）でもあり、小学校段階から指導の手は一人一人に入っているが、反面、自主性の充分育っていない所がみられる。そのため、自ら課題追究に取り組むことを苦手とする生徒も多く、理科の自由研究などのように、見通しをもって取り組まなければならない学習活動に対して、自力で課題追究のできる生徒は少数であるのが現状である。

そこで、最終的な姿や小ステップごとの活動成果が形となってみえやすい学習ならば、見通しをもって活動する能力を高められるのではないかと考え、活動の見通しと過程が形となって見える「ものづくり」を学習活動とすることにした。そして、最終的にものづくりでできた作品から、「高山村歴史民芸館」という形で高山村を発信しようと考えた。また、ものづくりを通し、指導をしてくださった講師の方々や昔の人々が、ものづくりをしながら何を考えてきたか、ものづくりに対しどんな願いや想いを込めてきたかを生徒に考えさせることもできるであろう。

このように、ものづくり取り入れた高山村歴史民芸館を開設する活動を通し、見通しをもって活動する能力を高められると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

総合的な学習の時間において江戸時代の高山村の風俗と、三国街道の交流に関する様々な体験活動をもとに、ものづくりを取り入れた課題づくり・課題追究をすることにより、日常生活を含めた諸活動において見通しを持って取り組める生徒が育成できることを明らかにする。

III　研究の見通し

１　高山村歴史民芸館の開設に向けた「課題設定」においては、課題作りと計画作成を行う際、①１学年で行った様々な体験活動を思い起こしたり、②教師と生徒との面談を計画的に実施することにより、ものづくりを取り入れた課題を設定することができ、高山村歴史民芸館開設までの概略をイメージした活動計画表を作成できるであろう。

２　「課題追究」においては、①ものづくりで作っている作品の進行状況を毎回記録に残しておき、振り返り活動を行わせたり、②面談を計画的に実施したりすることによって活動計画に修正を加えながら、完成への見通しをもつことができるであろう。

IV　研究の内容

1　基本的な考え方

（1）　「見通しをもって活動できる」とは

「自身が追究したい課題に対して、いつまでに、何をどのようにして、どう取り組んでいけば良いのかを考えたり、イメージをもつように心がけたりしながら活動計画を立案し、課題追究を進めながら計画に修正を加えることができること」ととらえる。

ここでは、ものづくりを中心とした学習課題に対して、完成予定日までに何の作業をどこまで進めれば良いのかを考え、計画を立案し、進行状況を見据えながら必要に応じて修正ができることと考えた。下の資料１のように、見通しをもつ生徒の姿を６段階ととらえ、手だてを施せば上の段階へと生徒は変容すると考えた。具体的には全体構想図の指導計画のように、課題設定と課題追究の段階を中心に担当教師との面談を通して、生徒の考え方や進行状況に対してきめ細かく支援を加えれば、段階のランクアップの手助けになると考えた。

資料1　「見通しをもつ」見取りの表

ランク	段階における生徒の姿
AAA	自分が追究したい課題に対して、自ら実現可能な計画を立て、追究活動に取り組める。また、見通しをもち、必要に応じて自ら計画に修正が加えられる。
AA	自分が追究したい課題に対して、自ら計画を立て、追究活動に取り組める。また、見通しをもち、教師の支援を受けながら必要に応じて計画に修正が加えられる。
A	自分が追究したい課題に対して、教師の支援を受けながら計画を立て、計画通りに追究活動に取り組める。また、教師の支援で必要に応じて計画に修正が加えられる。
B	教師の支援で自分が追究する課題をもち、教師の支援や指示で追究活動に取り組んだり、計画に修正が加えられたりできる。
C	教師の支援で自分が追究する課題をもとうとし、教師の支援や指示で追究活動に取り組んだり、計画に修正を加えられたりできる。
D	自分が追究したい課題をもとうとし、教師の支援や指示で追究活動や計画の修正に取り組もうとしている。

(2)　「高山村歴史民芸館」とは

江戸時代の高山村の風俗と三国街道での「人」、「もの」の交流に関するものづくりを行い、出来上がった作品や作業の写真等を本校２階廊下にある展示スペース及び空き教室に展示したものを指す。

また、ポートフォリオの一部として保管してある作品群の写真（デジタル画像データ）を学校ホームページ上で公開したものも指す。開設時期は２月を予定しており、開設式と兼ねて発表会も行う。

(3)　見通しをもって活動できる能力を高める指導の工夫

ア　計画的な面談の実施

課題設定と課題追究の段階において、意図的に行われる担当教師と生徒の１対１で行う相談を通した指導を指す。

課題作りの際、生徒が考えた１次案をもとに生徒は課題の内容や計画の見通しを担当教師に説明をする。教師は生徒の案の良さを積極的に評価しながら、内容や見通しが不充分なところはないか振り返らせ、自分でどのようにしていけば良いか考えさせられるような指導をする。また、生徒一人一人の実態により必要に応じて面接を繰り返し、課題解決への見通しをもつことができるようにする。

課題追究の際に、課題追究が学習計画表通り進まなくなり、見通しが立たないと生徒が考えた場合は、随時担当教師との面談を行うようにする。教師は計画の修正方法や、今後の見通しを生徒が考えられるようなアドバイスを行う。

面談の実施方法は、課題が設定された段階で、45人の生徒を学年担当教員４人に割り振り、生徒が担当教師の所へ行き、１人５分間を目安に面談を行う。実施は授業時間（50分×２）の前半50分内に行い、面談を行っていない生徒は自身で活動を進める。課題が決定した後、担当教員４人で打ち合わせをもち、４つのジャンルごとに指導する専門的な知識や、これまでの生徒とのかかわり方等を相談して担当を決め直し、計画段階の面談に臨む。

課題追究段階からは、課題追究を進めながら、計画に修正を加えさせられるように、作業途中の作品や計画表、作業途中の写真などをもとにして見通し通り課題追究が進んだか、生徒に振り返らせるようにする（詳しくは「振り返り活動を重視したポートフォリオの作成」を参照）。前時の振り返りをもとに、予定通り進まなかった生徒の中で、自力で課題解決までの見通しが立たなくなってしまった場合、必要に応じて教師との面談を促す。毎回、学習時間の前半50分内を面談時間として確保しておき、生徒の必要性及び教員の指導意図に応じて面談が行えるようにする。なお、面談で教師が生徒に問いかける基本的な言葉は、資料２の通りであり、生徒が自分の力で考えたり、予想したりしながら答えをさがせるように心がける。

資料２　面接の際に教師が問いかけた基本的な言葉

・どうしたら○○ができるかな？
・その次どうしたら良いかな？
・最終的にどんなものが作りたい（したい）の？
・あなたの作品（活動）の一番のウリは何？
・他の手段として、○○や△△などもあるね。

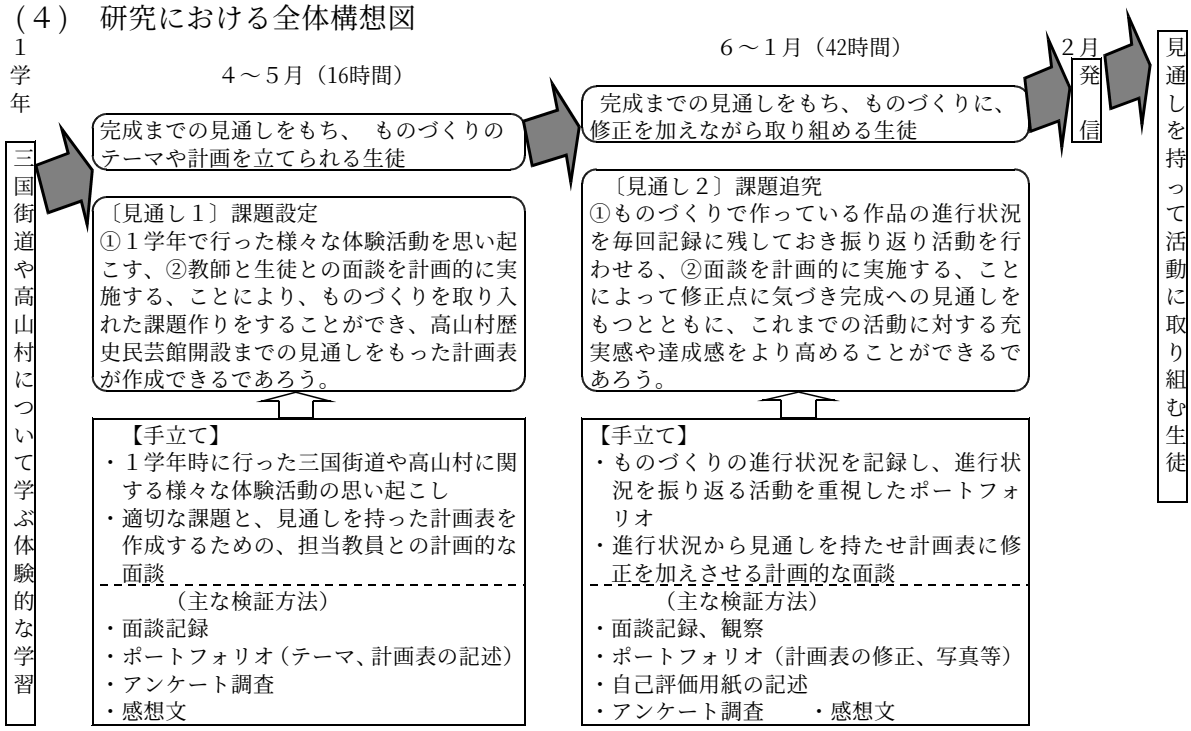
イ　振り返り活動を重視したポートフォリオの作成

課題決定後、日付と予定の入った学習計画表に自身の計画を記入する。作成したポートフォリオの計画表は、課題追究を進めながら細かい計画が後から決まったり、予定通りものづくりが進まなかったりした場合には、必要に応じて担当教師との面談を行い、計画表に随時変更点を付箋紙に書かせ、修正箇所に貼っていく。（Ｐ.88　図７参照）

課題追究では、ものづくりで作っている作品を生徒一人一人が活動時間の最後に毎回、デジタルカメラで撮影しておき、今までの作業の進行状況を振り返りながら自己評価し、次の活動に対して意欲を持続させる。さらに、完成日までに今の進み具合で間に合うのかどうか、今後

どこに時間をかけるべきか等、見通しをもたせる手助けにする。なお、写真の記録や作品の進み具合を見て、今後いつまでにどこまで作業を進めれば良いか見通しが立たず、計画や実践の修正の仕方が分からなかった生徒には、必要に応じて教師との面談を行う。また、食品などのように直接作品を展示できないものは、作業途中や完成した写真を高山村歴史民芸館の展示としても利用させていく。

（４） 研究における全体構想図



2　実践の概要および結果と考察

考察にあたっては抽出生徒（Ａ男）を中心とした面談・観察記録、アンケート調査、ポートフォリオの記入、ものづくりの作品、デジタルカメラでの記録、及び感想文を中心に行う。

Ａ男は、どの学習活動に対しても前向きで積極的に取り組む生徒である。また、部活動では県大会に向けて顧問の指導を素直に受けとめ、自身に目標を課し、努力のできるひたむきさも持ち合わせている。しかし、目標を達成するために具体的にはどのような活動を行っていけば良いのか、自ら計画を立てて行動することは得意ではない。「見通しをもつ生徒の姿」において教師の見取りは、「Ｂ」に該当する生徒である。本学習で自身の課題に対し、教師の支援を受けながら計画を立て、必要に応じて計画に修正を加えながら課題追究に取り組む活動を継続していけば、「見通しをもつ力」が高まるようになると考える。

(1)　様々な体験活動を思い起こし計画的な面談を実施することにより、見通しをもって課題作りと計画表作成ができたか。（見通し１）

ア　実践の概要

課題設定では、学年全体（45人）で、ブレーンストーミング法を使い高山村や三国街道の特徴やキーワードになる言葉を出し合った。そして、ＫＪ法を用いて特徴やキーワードになる言葉

資料３　１年時に行ってきた三国街道や高山村について学ぶ体験的な学習

○校歌から高山村を考えよう	（校歌の作詞・作曲者を招き校歌制作の話を聞く）
○三国街道の終着点を調べよう	（臨海学校で寺泊周辺にある資料館等の見学）
○中山宿について調べよう	（県内にある関連施設の見学）
○わらじづくり体験	（地域のお年寄りによる外部講師）
○三国街道の出発点を調べよう	（班別オリエンテーリングよる東京見学）

の仲間分けを行い、高山村や三国街道の特徴をまとめてみた。そして、１学年の総合的な学習の時間に行った様々な体験活動（資料３参照）の思い起こしや教師と生徒との面談を計画的に実施するのと同時に、自己の興味関心を明らかにし、ものづくりを通して課題追究ができないか考させた。そして、自身の課題を設定し、計画をワークシートに記入させた。

教師は生徒が課題を設定する際面談で、ものづくりを切り口にして解決可能な課題であるのか、１年間かけて解決する価値のある課題（課題が大きすぎる、簡単すぎるなど）なのか明確にさせる支援を行った。また、計画表が記入できない生徒に対しては、完成予定日までに作品を仕上げるには、いつまでに何を、どのようにして、どう取り組んでいけば良いのか、教師が１つ１つ質問をしながら確認をし、不充分な部分に対しては極力本人の力で考え、修正するよう再度質問を繰り返した。

イ　結果と考察

①全体の様子

課題設定時において、最初から適切な課題が設定できた生徒は10人ほどで、それ以外の生徒は「中山宿を調べる」といったような課題が大きすぎる生徒が多かった。１回目の担当教師との面談後、ものづくりを通して１年間で追究するのに適切な課題を設定できた生徒が大部分にのぼり、残りの生徒は繰り返し面談を行って課題を設定することができた。なお、生徒が考えた課題の例は資料４の通りであり、課題設定後の生徒の感想文には資料５の様なものがあった。

資料4　生徒が考えた課題の例

○江戸時代の権力の象徴だった江戸城の作りを調べ、模型で再現
○写真集「高山村　今と昔」づくり
○宿屋の名前を調べ、中山宿をジオラマで再現
○本陣で出されていた食事のレシピを調べ、実際に作ってみよう
○高山村に今でもたくさんある道祖神のレプリカ制作
○三国街道を通った人々の服装を調べて人形を作る
○旅人の持ち物だった印ろうの実物大模型づくり

資料5　生徒の感想文（抜粋）

○寺泊の資料館の見学が、三国街道につながる金山をジオラマで再現するきっかけになりました。
○昔の人の着物にきょうみを持っていました。先生と話しあっているうちに、着せかえ人形に着物を作って着させるアイデアが浮かんできました。
○中山宿の宿場町の再現をテーマにするのに、江戸博の模型が思い出された。
○旅人の持ち物を見たのがきっかけで、薬草採集をして昔の薬作りをしようと思った。

また、課題設定後に行ったアンケートで「課題設定をする時に、参考になったことは？」と聞いたところ、図１のような結果になった。すると、「１年の総合学習で体験したこと」を挙げた生徒が一番多かった。これは、１学年時において、体験してきた寺泊歴史民族資料館や猿ヶ京関所資料館の見学、わらじづくりなどの振り返りが課題設定において、有効だったと考えられる。次いで「教師のアドバイス」になっており、計画的に実施してきた教師との面談もやはり、有効であったと考えることができる。

「計画を作成する時参考になったことは？」（図２）に対しては「教師のアドバイス」

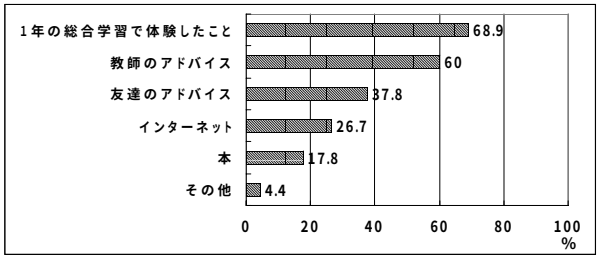


図1　「課題設定をする時に参考になったことは？」（複数解答）

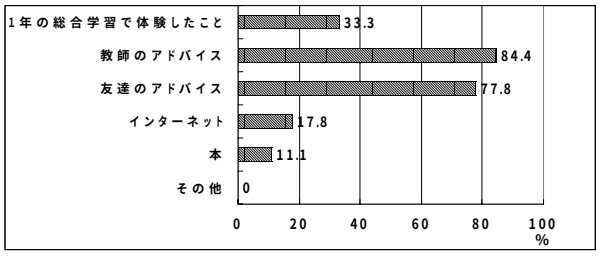


図2　「計画を作成する時、参考になったことは？」（複数解答）

を挙げた生徒が一番多かった。先を見通した計画を作成するにあたっては、教師からの計画的な面談が、一番有効である感じている生徒が多いことが分かる。生徒一人一人の異なった課題に対応して、「いつまでに」「何を」「どうするのか」を明確にさせられるのは面談時における教師の細かく臨機応変なアドバイスが、一番効果的であったと考えられる。

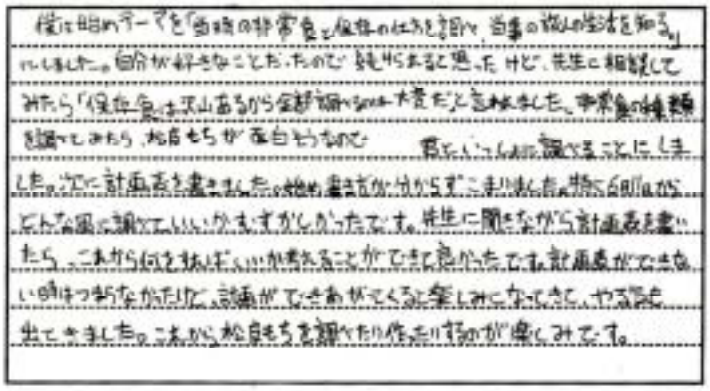
また、「友達のアドバイス」が次いでいる。友達同士ではできないフォローを考えて面談してきたが、発達段階を考えても中学生の学習活動において友達の意見やアドバイスの影響は非常に大きいことが分かった。

以上のような結果から、課題設定や計画表作成の際、１年時の体験活動や教師の計画的な面談が、見通しをもつためのきっかけになった生徒が多かったと考えられる。

②　抽出生徒の様子

Ａ男の書いた感想を読むと、「自分が好きなことだった」とあるように、当初から三国街道に暮らした昔の人々の生活、特に食に関する興味・関心が高く意欲的に学習へ取り組もうとしている様子が見られる。このことから１学年時における体験活動の振り返りが、課題設定に対し、有効に働いていたと考える。

資料６　Ａ男の感想


僕は始めテーマを「当時の保存食」と保存の仕方を調べ、当時の人の生活を知る」にしました。自分が好きなことだったので楽しくなると思ったけど、先生に相談してみたら「保存食は沢山あるから全部調べるのは大変だ」と言われました。中保存食の種類を調べてみたら、松皮もちが面白そうなので　[illegible]　調べることにしました。次に計画表を書きました。始めは書き方が分からずこまりました。特に何のために　どんな風に調べていいかもむずかしかったです。先生に聞きながら計画表を書いたら、これから何をすればいいかが考えることができて良かったです。計画表ができない時はつまらなかったけど、計画ができあがってくると楽しみになってきて、やる気が出てきました。これから松皮もちを調べたり作ったりするのが楽しみです。

課題解決への見通しという面から言えば課題が大きすぎるということに気づいておらず、見通しが甘い状況にあった。それに対し、担当教師との面談で、担当教師が「保存食では１年間で調べる課題としては大きすぎるのではないか。」と問いかけた。そして、課題を絞り込めるように「保存食の種類を調べてみて、最も興味のあるものを１つ、選んでみたら。」とアドバイスを与えた。その後、Ａ男は課題を「松皮もち」について調べることへ修正した。教師との計画的な面談がきっかけで課題設定に修正を加えることができたと考えられ、Ａ男自身、課題解決への見通しを持つことができたと考える。

計画書の作成に対しては、「書き方が分からず」とあるように、はじめは課題追究への見通しが立たず、「つまらない」と自身の努力と成果に満足していない様子が見られる。しかし、教師との面談を受け、計画表が書けて今後の見通しが立ってくるようになると「楽しみになってきて、やる気が出てきました。」とあるように、テーマや計画が立てられ、課題追求の見通しが持てたことにより、課題に対して前向きな姿勢が出てきたと考えられ、自身の課題追求に対して努力していこうとしている様子が見られる。

（２）　振り返り活動を重視したポートフォリオと計画的な面談を実施することにより、計画に修正を加えながら完成までの見通しをもち、ものづくりに取り組むことができたか。（見通し２）

ア　実践の概要

課題追究では、ものづくりで作っている作品を生徒一人一人が毎時間の最後にデジタルカメラで撮影しておき、今までの作業の進み具合を振り返りながら、次回の活動に対して意欲を持続させるとともに、完成までの見通しをもたせる手助けにした。

写真の記録や作品の進み具合を見て、今後いつまでにどのような作業を進めれば良いか分からなかったり、計画の修正の方向性が分からなかったりする生徒に対しては、必要に応じて教師との面談を行うように促した。

課題設定時に作成したポートフォリオの一部である計画表は、課題追究を進めながら、必要に応じて変更点を付箋紙に記入させ修正箇所にはらせることにより、計画に修正を加えさせていった。

イ　結果と考察

①全体の様子

課題追究の段階において、学習活動の終了時に、４回（９月上旬、10月上旬、11月中旬、12月中旬）アンケートを実施した。図３の「今日の活動は？」を見ると、「計画通り」と「ほぼ計画通り」の合わせた割合が、２回目を除き回数を重ねるごとに増加していることが分かる。

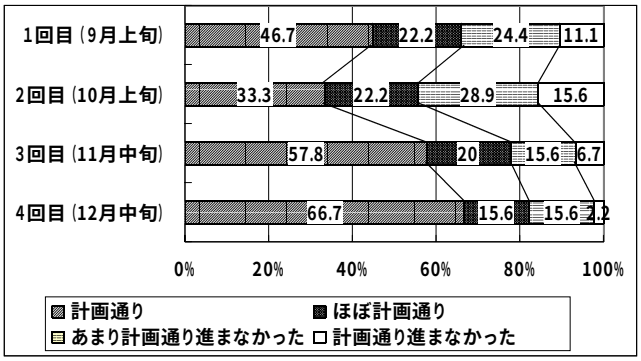


図３　「今日の活動は？」

また、図４の「次の時間、何をすれば良いか見通しが立っているか？」においても、「立っている」と答えた生徒が２回目を除いて回数を重ねるごとに増加していることが分かる。

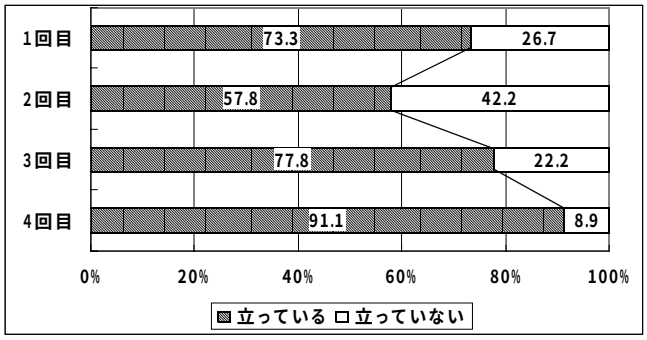


図４　「次の時間何をすれば良いか見通しが立っているか？」

２回目のアンケートの時に書かれた生徒の感想文には、「計画通り進まないので、どうしたら良いか相談にのってほしい。」「設計図通りに日本橋ができないので、材料をどうしたらよいだろう？」といったものがある。このことから、図３、４において２回目が両方とも減少しているのは、課題追究を始めたばかりの１回目の授業では、ある程度計画通りに活動に取り組めていた生徒が多かったものの、次第に計画通りに進まず、自分の活動に見通しの立たない生徒が増えてきたからだったと考える。

また、12月に表１の「見通しをもつ」見取りの表を生徒向けに直したものでアンケートを行い、４月と12月の自分の姿を比較させてみた（図５）。結果を見ると４月は「B」が21人と一番多く、次いで「C」が14人となっていた。それに対し、12 月は「B」が18人と依然一番多いが、「A」が15人で次いでおり、「A」と答えた生徒の増加が著しかった。

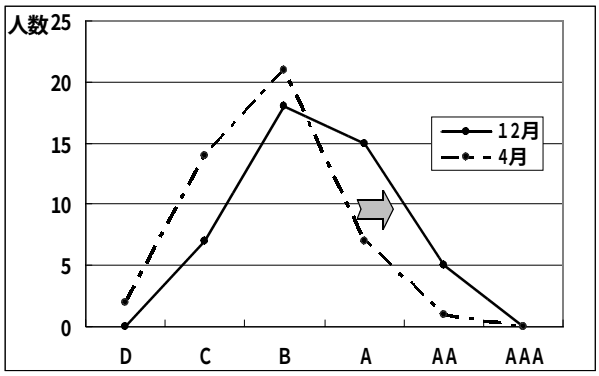


図５　「４月から１２月の自分の変容」（生徒アンケート）

このように、図３，４，５の結果を見ると、自分の活動の進み具合を適切に把握し、見通しを持ちながら活動できる生徒が、増加してきている。その原因は、計画的な面談や、振り返りを重視したポートフォリオを実施していく中で、試行錯誤を繰り返し行い、次第に見通しの立て直しや、修正のできる生徒が増えてきたためだと考える。

「ものづくりの見通しを立てる（立て直す）のにどのような手段をとったか？」では１回目

と４回目の結果を比較してみた。見通し１のアンケート結果と同様、１回目を見ると「教師に相談」と「友達に相談」が高くなっている。しかし、４回目の結果では両方とも減少している。それに対して、「自分で考え直す」では、１回目と４回目を比較すると、著しく増加していることが分かる。感想にも「どうすれば本物らしくなるか、着物の帯の材料をいろいろ変えたり、しばり方を工夫したりしてみました。」「家の中のつくりがよく分からなかったので、本で調べ直して設計図を書き直した。」などと、書かれているものがある。この結果から、自力で自分の活動の方向性や計画の見直しのできる生徒が増えてきたと考えることができる。

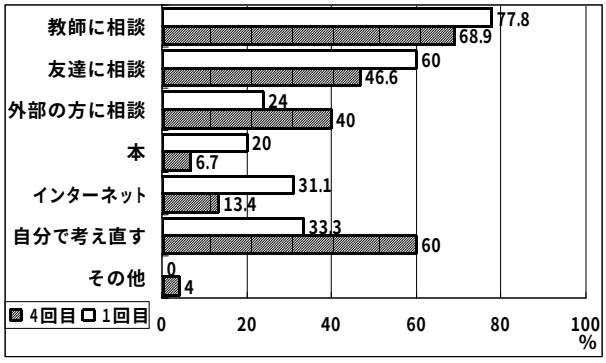


図６　「ものづくりの見通しを立てる（立て直す）のにどのような手段をとったか？」（複数回答）

②抽出生徒の様子

Ａ男の学習計画表を見ると、課題設定段階において大まかな計画のみを作成しており、課題追究と並行しながらテーマを絞り込み、松皮もちについて調べていくことになったのが、貼り付けられた付箋紙から分かる。また、「実際に作ってみる」段階に入った所で、「失敗したので、もう一度くわしく作り方を調べてみる」など、松皮もち作りに修正を加えながら、取り組んできていることも分かる。

12月中旬にＡ男が書いた課題設定からの感想を見ると、「図書館で調べてみたけれど、見つからないのでインターネットで調べました。」とあるように、松皮もちの作り方を１つだけでなく、様々な手段を考え、課題追究に取り組もうとしている様子が読み取れる。また、「（写真とは）全然違うものになってしまいました。」と書いているように、１回松皮もちを作ったが、うまくいかず、その後、担当教員と計画的な面談を行っている。その時担当教員は、Ａ男が考えていなかった他の追究方法をいくつか示唆した。その中の１つの「実物を調べてみる方法」から、Ａ男は、松皮もちを作っている場所を調べ、そこから松皮もちを取り寄せることを考えた。その後松皮もちで有

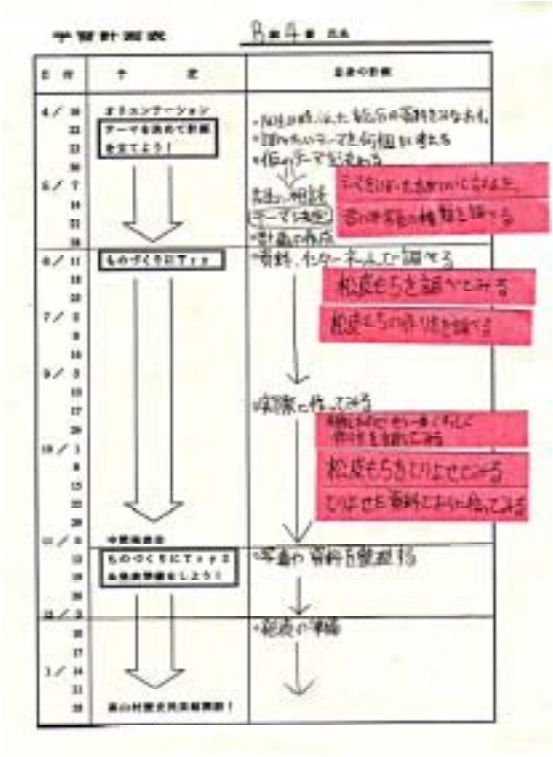
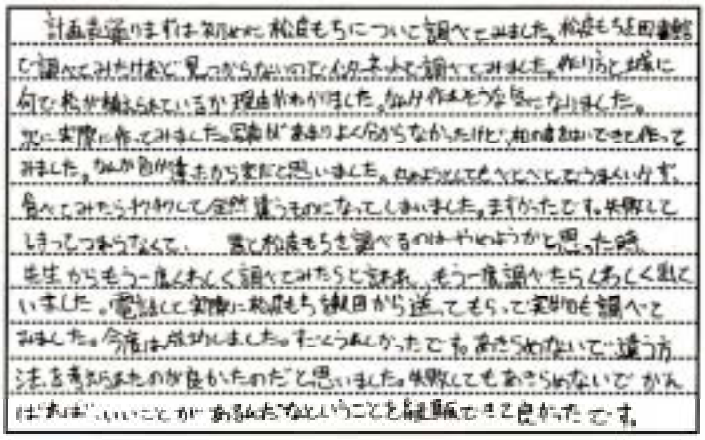


図７　Ａ男の学習計画表

資料７　Ａ男の感想


計画表作りまずは初めに松皮もちについて調べてみました。松皮もちを図書館で調べてみたけれど見つからないのでインターネットで調べてみました。作り方と様に何で松が巻いられているか理由がわかりました。なんか作ってみる気になりました。次に実際に作ってみました。写真はあまりよく分からなかったけど、和の道具はいっぱい作ってみました。なんか自信があるからまだと思いました。ねんどでもやってみてもうまくいかず、自分でやってみたらやっぱりして全然違うものになってしまいました。ますかたです。失敗してしまってしまうなんて。　実に松皮もちを調べるのはやめようかと思った時先生からもう一度もっとくわしく調べてみたらと言われ、もう一度調べたらとくわしく乗っていました。電話して実際に松皮もち職人から送ってもらって実物も調べてみました。今度は成功しました。すごくうれしかったです。あきらめないで違う方法を考えられたのが良かったのだと思いました。失敗してもあきらめないでがんばればいいことがあるんだなということを理解できて良かったです。

名な場所の観光協会に電話で問い合わせ、松皮もちと松皮もちの詳しい作り方の資料を郵送で取り寄せた。２回目の松皮もちづくりでは「今度は成功しました。すごくうれしかったです。」と感想が書かれているように、松皮もちの実物と資料をもとにして本人も満足するものを作ることができた。

また、Ａ男に話を聞くと、「昔の人は、こんな手間ひまをかけて城に植えている松の皮をはぎ、松皮もちをつくって戦の間しのいでいたなんて、信じられない！」と語っていた。このことから、Ａ男は、松皮もちづくりを通し、昔の人々の苦労と忍耐に対して想いをはせていたことが分かる。

アンケート結果の「４月から12月の自分の変容」において、Ａ男は４月において「Ｂ」と答えていたが、12月では「Ａ」と答えており、学習計画表の修正や感想、アンケート、教師の観察からも、見通しをもつ能力が徐々にではあるが、高まってきたと言える。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

○ものづくりの計画と作成に対して、計画的な面談と、振り返りを重視したポートフォリオを実施することにより、見通しを持って活動できる能力を一人一人の実態に応じて高めることができた。

○１年時において、行ってきた三国街道や高山村について学ぶ体験的な学習は、単元の配列の良さを生かし、生徒にイメージをわかせやすく、課題設定に対して有効に働いた。

○ものづくりという特性から、生徒は終始意欲的に学習活動に取り組めた。

図８　完成した作品の一部

（後　写真集「高山村 今と昔」　中　中山宿のジオラマ　前左から　徳川家の兜の模型　江戸城の模型　道祖神のレプリカ　印籠の実物大模型　日本橋のカットモデル）

2　今後の課題

課題追究の見通しが立ち活動が進むにつれ、生徒たちは自身の課題追究に対しての積極性は高まっていったものの、「高山村歴史民芸館を作ろう」という全体の目標が次第に薄れてしまった傾向にあった。しかし、課題追究の途中で行った中間発表会において、町村合併のことが話題となり、「みんなでこれだけのものを作って、校内の展示で終わってしまうのはもったいない。町村合併で、なくなってしまうかもしれない高山村のことを村の人や、高山村を訪れた人にもっと知ってもらえるよう、これを村の公民館の展示コーナーに展示してもらえないだろうか。」という意見が出てきた。高山村を自分たちの手で発信していきたいという意欲の高まりの生かせる方法を今後、模索していきたい。

〈参考文献〉

・『新版　現代学校教育大辞典３』　ぎょうせい
・加藤　幸次　浅沼　茂　編『実践　総合的な学習の運営　中学校編』　図書文化(2000)
・余田　義彦　編『生きる力を育てるデジタルポートフォリオ学習と評価』高陵社書店(2001)